Osaka University Knowledge Archive

Title	サハ語の自然談話におけるモダリティを表す小詞diiの用法
Author(s)	Prokopeva, Mariia
Citation	外国語教育のフロンティア. 2025, 8, p. 107-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100888
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

サハ語の自然談話におけるモダリティを表す小詞 dii の用法

Uses of the Modal Particle *dii* in Sakha Natural Discourse

Prokopeva Mariia

要約

Modal particles in Sakha（Yakut）, a North Siberian Turkic language, play a significant role in speech, much like in other languages. However, these linguistic categories have yet to be thoroughly examined, especially concerning their communicative functions in spoken discourse. Most previous studies primarily focused on morphological and syntactic features, neglecting the usage of such particles in everyday informal conversation and the interactional attitudes of the speakers. This gap underscores the need for further research.

The present study discusses the interactional usage of the modal（also called sentence-final）particle *dii* based on the cognitive status of both the speaker and addressee. Petrov（1978: 108-109）defines it as an intensifying particle expressing confirmation and assertion in Sakha. Additionally, depending on the overall context, it can convey a tone of objection and accusation toward the interlocutor. The conversational data collected and analyzed in this research are drawn from two interviews with Sakha native speakers.

The findings indicate that *dii* appears both when interlocutors share common knowledge, opinion or emotion and when they do not. In the former case, *dii* expresses or elicits confirmation and displays or seeks agreement/empathy, essentially aligning with the addressee. Conversely, in the latter case, it is used to challenge the position of the interlocutor.

キーワード：サハ語（ヤクート語）・談話分析・隣接ペア・モダリティを表す小詞

1. はじめに

サハ語は、Johanson（2021: 22-23）の分類によるとチュルク諸語の北東 / シベリアの語群（The Northeastern or Siberian branch）に属する言語である。ロシア連邦の北東に所在するサハ共和国（ロシア語での正式名：Respublika Saxa（Yakutiya））において、サハ語とロシア語は国家語であり、北方先住少数民族の言語であるドルガン語、チュクチ語、エヴェンキ語、エヴェン語、ユカギール語という 5 つの言語が公用語として認められている。サハ語の話者数は現在、約 47 万人である。ロシア語で「ヤクート語」（yakutskiy yazïk）と呼ばれるが、本稿では、自称する民族名称である「サハ」（Saxa）を用いて「サハ語」とする。

サハ語学における小詞は、ロシア語学における小詞と同様に、独立した語彙的な意味も語形変化も持たない補助語（ロシア語で služebnoe slovo）として位置付けられている（ハリトノフ（Xaritonov）et al. 1982）。ペトロフ（Petrov 1978: 65, 252）によれば、小詞の多義性のためその明確な分類が難しいという。それ故に区別するにはいくつかの

方法があり、その一つは、叙法性を有する小詞と、有しない小詞（ロシア語で logiko-smïslovïe častitsï）の二つに大きく分ける分類であると述べている。また起源による分類も提案しており、これは、叙法小詞を三種に分けるもので、即ち、自立語としての語彙的な意味を失った「本来の小詞」、動詞あるいは名詞から派生し、その意味の一部を受け継いでいる「動詞由来の小詞」並びに「名詞由来の小詞」の三種であるとも述べている。

サハ語におけるモダリティを表す小詞は他の言語と同じように多様な意味を持ち、その用法は多岐に渡っている。モダリティの研究は、様々な視点から行われてきている（Xaritonov et al. 1982[1]），エフレモフ（Efremov）2010[2]），江畑（2013[3], 2020），アレクセーエフとソロワ（Alekseev and Sorova）2017[4]），イワノワ（Ivanova）2017[5], 2018 等）。それらの中で Petrov（1976, 1978, 1982, 1984, 1988）は、多数の小詞（モダリティを表す小詞とそうでない小詞）、モダリティを表す語[6]、モダリティを表す成句[7]を全体的に記述することを試み、それらの意味と用法、形態的及び統語論的な振る舞いについて記述している。

現代サハ語における談話、特に自然談話をデータとして用いた言語コミュニケーションに関する研究には、Alekseev（1990），Sorova（2008），ペトゥホワとソクール（Petuxova and Sokur 2021a[8]），Petuxova and Sokur（2021b）などがあるが、それほど盛んに研究されているわけではない。

従来の研究では、自然談話のデータを用いておらず、小説や新聞など各種の記事から抽出された書き言葉のデータのみを用いていることを指摘すべきだろう。それらの先行研究の内容は様々であり、特に対話に着目する研究でも小説の中に書かれた対話を扱っている。

本研究では、サハ語の自然会話におけるモダリティを表す小詞 dii の用法の多様性が生じる原理を話者の認識・意見・感情という文の命題内容の区別と会話上の出現位置から実証的に論じる。

本稿の構成は次の通りである。第 2 節では、小詞 dii に関する先行研究の記述をまとめ、問題提起をする。第 3 節では、あらためて本研究の目的について確認し、分析対象としたデータの概要について述べる。第 4 節では、分析の結果を提示し、考察を行う。最後に第 5 節では、結論と今後の課題を提示する。

2. モダリティを表す小詞 dii の先行研究

本節では、これまでの dii を分析対象とした先行研究の記述と具体的な例文について述べる。

Petrov（1978: 108-109）によると、小詞 dii は動詞 die-「言う」から派生した副動詞の形式であり、本来の意味から離れ、副動詞とは表記上のみ一致している叙法小詞であるという。接続に関しては、文末に現れ、主に平叙文と感嘆文の主節述語（名詞述語・動詞述語）に後続するが、命令法、条件法、可能法の動詞を用いた文に付加されることはほとんどないと指摘されている。他の小詞と共起する場合はあるが、各小詞が従来の意味を保持すると述べている。その用法に関しては、主に命題内容を強める情意性を持つ小詞の一つ[9]であり（Petrov 1978: 255）、基本的な用法として「強意／強調」、「主

張」、「確認」を取り上げている。また感嘆文で使用される際は、詠嘆の意を表す小詞として機能すると指摘している（Petrov 1978: 108-109）。ここで取り上げられている具体例を以下のように示す。

なお、以下の（1），（2），（3），（4）の日本語訳に関しては、サハ語の原文にはなかった単語を補うに際して、Petrov（1978: 108-109）によるロシア語訳を参考にしたので、それらのロシア語訳（露訳）をサハ語の原文の下に示す。サハ語とロシア語のイタリックは Petrov（1978: 109）による。

Petrov（1978: 109）における例文のサハ語とロシア語のグロス、それらの日本語訳は全て筆者による。また dii の太字も筆者による。以下に Petrov（1978: 109）の 4 例を示す。

（1） Uol-larï[10] beye-leri kuorak-ka kil-ler-en bier-e-r-ge
boy-ACC self-ACC city-DAT enter-CAUS-CVB AUX-PRS-3SG-DAT
uon bies süüh-ü *ïl-an* *tur-a-кïn* ***dii***
ten five ruble-ACC take-CVB AUX-PRS-2SG MODP
Za to, čtobï svezti menya i mal’ts-a v gorod,
For that CONJ take.INF 1SG.ACC and boy- SG.M.ACC ALL city.SG.M.ACC.
tï *ved’* *uže* *poluči-l* pyatnadtsat’ rubl-ey. （露訳）
2SG MODP already get-PST-SG fifteen ruble-PL.ACC
「私と少年を都会まで連れていくために、15 ルーブルをもうもらっているじゃないか。」
（Petrov 1978: 109）

（2） Sie-ri *gïn-a-r* ***dii***
eat-CVB AUX-PRS-3SG MODP
Ved’ *xoč-et* *s”est’* menya （露訳）
MODP want-PRS.3SG eat.INF 1SG.ACC
「そいつは（私を）食おうとしているじゃないか。」（Petrov 1978: 109）

（3） Satana sïlgï-lar-a bu manan emie *toкu köt-ön* *kees-ter*
damn horse-PL-POSS.3SG this here MODP take down-CVB AUX-PST.3PL
ebit ***dii***
MODP MODP
Ved’ et-i proklyat-ïe lošad-i, *okazïvaetsya*, i zdes’ *svali-l-i*
MODP this-PL damned-PL horse-PL.NOM actually also here take down-PST-PL
izgorod’ （露訳）
fence.SG.F.ACC
「いまいましい馬のやつらめ、ここでも（柵を）蹴り飛ばしてしまったんだよ。」
（Petrov 1978: 109）

（4） Oo, *umull-an* *xaal-l-a* ***dii*** !
INJ go out-CVB AUX-PST-3SG MODP
O, *pogas-l-a* že （sveč-a）[11]! （露訳）
INJ go out-PST-SG MODP candle-SG.F.NOM
「あら、（蝋燭の火が）消えてしまった！」（Petrov 1978: 109）

スレプツォフ（Sleptsov 2006: 116）の『サハ語詳解大辞典』では、上述した Petrov（1978）における用法の他に「反論」（例 5）、「非難」（例 6）という意味も挙げられている。具体的な例は以下の通りである。

（5）Otton　er kihi-gin　***dii***,　sübe-t-in　bul　ee
MODW　man-COP.2SG　MODP　solution-POSS.3SG-ACC　find.IMP.2SG　MODP
「だって、男だろう、解決法を見つけろ。」　Sleptsov（2006: 116）

（6）Il’ya　kihi　bökö-ʁün　***dii***
PN　human　MODP-COP.2SG　MODP
「イリヤ、あなた、残念な人だね」　Sleptsov（2006: 116）

江畑（2013: 74-75）によるサハ語における文末接語の研究では、dii が対人的モダリティを表す文末接語と見なし、主な意味の一つである「確認」の意味で使われる場面を二つに分けて論じている。これは、①話し手と聞き手が命題内容を十分に認識している際に再確認が生じる場面（例 7）と、②命題内容に関して知識のある話し手が、それを認識していない聞き手に命題内容の確認を要求する場面（例 8, 9）であるという。以下の例（7），（8），（9）の日本語訳は江畑（2013: 74-75）によるものであり、グロスは筆者による。

（7）düŋür　tïah-a　***dii***
shamanic tambourine-like drum　sound-POSS.3SG　MODP
「[あれは] 太鼓の音だね」　江畑（2013: 75）

（8）arba　sonum-mu-n　kepsee-bek-ke　olor-o-bun　***dii***
by the way　news-POSS.1SG-ACC　tell-NEG-CVB　AUX-PRS-1SG　MODP
「ところで、私はまだ近況を話していないじゃないか」　江畑（2013: 74）

（9）tuox　tuox-taa　aʁal　ere
what　what-VBLZ.IMP.2SG　bring.IMP.2SG　MODP
bïtïïlka-m　suox　di-i-bin　***dii***
bottle-POSS.1SG NEG.COP.3SG　say-PRS-1SG　MODP
話者 A「あれだ、あれをくれ。持ってきてくれ！」
話者 B「私の瓶は無いと言っているでしょう」　江畑（2013: 74）

上記の例を見ると、（9）以外は、8 つの例は対話の形式になっておらず、具体的な場面について説明がされていないため、それらの発話は先行する発話に対する応答であるのか、先行する発話自体になっているのかは明確ではない（（5）の「反論」のみがある種の発話に対する応答として見なすことができる）。（2），（4），（7）の短い発話の場合は、著者によるロシア語訳、日本語訳がなく、そのまま掲載されていれば、dii がどの用法になるのかが判断しにくい。さらに dii の意味やニュアンスはイントネーションによっても左右されることがある。具体的に述べると、（4）のような詠嘆の意を表す短い発話における dii は、ここで驚きを表すのか、残念な気持ちを表すのかが分かりづ

らい。それについて上述の先行研究では指摘されていない。

以上のように、本節でサハ語のモダリティ、会話や対話に関する先行研究について述べ、先行研究におけるモダリティを表す小詞 dii を対象にした記述と例文を示した。本研究では、現代サハ語の自然談話における dii の用法の特徴を明らかにするため、Ⅰ. 会話における dii の出現位置、Ⅱ. 江畑（2013）で指摘された話し手と聞き手の認識の一致・不一致、という視点から「確認」以外の用法に関する説明は可能であるどうか、という 2 点を問題として提起し、考察を行う。

3. データ概要

本研究では、話し言葉としても書き言葉としても頻繁に使用されるモダリティの小詞 dii の用法を、自然会話のデータに基づいて出現位置と参与者の認識の視点から詳細に検討し、会話における特徴を明らかにすることを目的とする。

本研究の調査では、個人による YouTube チャンネルに公開されたサハ語によるインフォーマルなインタビューの動画をデータとして用いた。インタビューの構造は、雑談などの構造と異なり、質問をする側（インタビュアー）とそれに応じる側（インタビュイー）は事前に決定しており、それらの役割を交代することは不可能である。そのため、インタビューのような自然会話では、問いを掛けたり、また相手の応答に沿って、ある種の情報などを確認したりするインタビュアーによる発話が dii によって出現し、さらにインタビューに応じるインタビュイーの応答にも dii が現れると考えられる。そのため、dii の出現する自然会話のデータとしてインタビューのデータを有効なものとみなし用いた。両者は現地でインタビューが行われる時点で、自身の活躍の影響である程度の知名度を得たサハ人である。各インタビューは主にその人のこれまでの経歴、また現在の活躍をテーマとしている。その詳細は以下のようにまとめる。

インタビュー（1）は 2021 年 11 月 09 日に掲載され、その継続時間は 58 分程度である。登場者はマジシャンとして活躍する 20 代の男性である。

インタビュー（2）は 2022 年 3 月 18 日に掲載され、その継続時間は約 1 時間 15 分である。登場者はフードブロガーとして活躍する 30 代の女性である。

本調査で収集したデータの文字化をする際には、シェグロフ（Schegloff 2007）で使用された記号を用いた。

4. 分析の結果と考察

本節において分析の枠組みを述べる。データから抽出した小詞 dii の用例の考察を通して 2 節で既述した Petrov（1978）, Sleptsov（2006）に挙げられている用法を参考にシェグロフとサックス（Schegloff and Sacks 1973）による「隣接ペア」（adjacency pair）の概念の視点から論じていく。

まずは dii が現れる発話の命題内容に沿って大きく「事実」、「意見」、「感情」という 3 種類に分類した。それぞれの定義に関しては、澤田（2014: iv-v）による「命題的意味[12]」と「モダリティ的意味[13]」を援用しつつて次のように定める。「事実」は判断を伴わない（客観的に）真である命題である。「意見」は（客観的に）真であるか否かが定かではない命題に対する判断（・評価）である。「感情」は真であると判断済みの命題に対

する評価である。

次に dii が現れる発話の出現位置について説明する。会話分析[14]における基本的な概念の一つである「連鎖組織（sequence organization）」（Schegloff 2007）は、実際のやりとりにおいて一つの行為として「質問 – 応答」のようにある発話は他の発話と適切に結びついており、その間に存在する規範的なつながりを体系化する仕組みであると言われている。連鎖組織の基本的な最小単位は「隣接ペア」（adjacency pair）（Schegloff and Sacks 1973）である。その主な特徴は以下である。

- “[…] adjacency pairs consist of sequences which properly have the following features:（1）two utterance length,（2）adjacent positioning of component utterances,（3）different speakers producing each utterance.”
- “The typology operates in two ways: it partitions utterance types into ‘first pair parts’（i.e., first parts of pairs）and second pair parts; and it affiliates a first pair part and a second pair part to form a ‘pair type’. ‘Question-answer,’ ‘greeting-greeting,’ ‘offer-acceptance/refusal’ are instances of pair types.”

（Schegloff and Sacks 1973: 295-296）

上記の「隣接ペア」の概念に基づいて dii の発話を会話における出現位置によって「要求型発話」と「応答型発話」に分けた。さらに「応答型の発話」の場合は、江畑（2013）で説明された話し手と聞き手の認識の一致と不一致という観点を考慮し、用法の区別条件とした。上述した特徴をまとめた表 1 は以下の通りである。

表 1　モダリティを表す小詞 dii の用法

命題内容	発話の種類		
	要求型発話	応答型発話	
1. 事実	1.1【事実確認】	1.2【事実肯定】（認識一致）	1.3【事実訂正】（認識不一致）
2. 意見	2.1【意見確認】	2.2【同意表明】（認識一致）	2.3【反論表明】（認識不一致）
3. 感情	3.1【感情確認】	3.2【感情表明】（認識一致）	3.3【不満表明】（認識不一致）

続いて表 1 で表示したそれぞれの用法の定義を以下の表 2 にて示す。

表 2　発話における dii の各種用法の定義

1. 事実	
1.1【事実確認】	聞き手がある事柄が事実か否かについて話し手と同じ認識を持っていることを確認する。
1.2【事実肯定】	ある事柄が事実か否かについて話し手と同じ認識を持っている聞き手に対し、自身の認識を表明する。
1.3【事実訂正】	ある事柄が事実か否かについて話し手と異なる認識を持っている聞き手に対し、自身の認識を表明する。発話は聞き手の認識を否定・訂正する発話内効力を持つ。
2. 意見	
2.1【意見確認】	聞き手がある（真かであるか偽であるかが定かではない）命題について話し手と同じ判断・評価を下していることを確認する。
2.2【同意表明】	ある（真かであるか偽であるかが定かではない）命題について話し手と同じ判断を下している（＝同じ意見を持つ）聞き手に対し、自身の判断（意見）を表明する。
2.3【反論表明】	ある命題について話し手と異なる判断を下している（＝異なる意見を持つ）聞き手に対し、自身の判断を表明する。発話は聞き手の判断を否定・訂正する（＝反論する）発話内効力を持つ。
3. 感情	
3.1【感情確認】	ある（真である）命題について聞き手が話し手と同じ評価を下している（＝感情をもつ）ことを確認する。
3.2【感情表明】	ある（真である）命題について話し手が聞き手と同じ評価を下している（＝同じ感情をもつ）ことを表明する。
3.3【不満表明】	ある（真である）命題について話し手と異なる評価を下している（＝異なる感情をもつ）聞き手に対し、自身の評価（感情）を表明する。発話は聞き手の評価を否定・訂正する（＝聞き手に対する不満を表明する）発話内効力を持つ。

続いて具体的な例を取り上げ、まず小詞 dii が要求型の発話に出現する場合を見ていく。小詞 dii は日本語に訳すと概ね「～ね、～よ（ね）、～だろう／でしょう、～ではないか」に当たるが、談話の全体的意味に加え前後の発話、発話連鎖との関連によって異なる表現が用いられることもあると考える。本稿における例文の和訳は直訳に近い訳にした。なお、本調査では表 1 に挙げられた 2.2【同意表明】、3.2【感情表明】、【3.3 不満表明】の用法が出現しなかったため、見られた例のみ示す。

1.1【事実確認】

用例（10）

909 S1: Moskva-ʁa　tiiy-e　sïld’ ï-bït-ïŋ　***dii***?
　　TN-DAT　arrive-CVB　AUX-PST-2SG　MODP
910 S2: Mxm.
　　INJ
911 S1: Tuox-xa　tiiy-e　sïld’ ï-bïk-kïn-ïy?
　　what-DAT　arrive-CVB　AUX-PST-2SG-WHQ
S1:「モスクワへ行ってきましたね」

S2:「ええ」
S1:「何の目的で行きましたか」

用例（10）では、話者 1（インタビュアー）が話者 2（インタビュイー）に対して具体的な質問を投げかける前に、モスクワに行ってきたのが事実であることを dii を伴う発話によって確認している。この発話が出現するまでは、話者 2 が自身のモスクワへの旅に関して言及していなかったため、話者 1 はインタビューの前に話者 2 がモスクワへ旅に行ってきたことが事実である自身の認識が相手との認識と一致していることを確認している。

用例（11）

4 S3:	Ugu	xannïk	baʁar-a-r	kepset-ii	beye-ni	bilsih-ii-tten
	INJ	what	wish-PRS-3SG	talk-NMLZ	self-ACC	know.RECP-NMLZ-ABL
	mannïk	bilsih-ii-tten	saʁala-n-a-r	***dii***?		
	so	know.RECP-NMLZ-ABL	begin-REFL-PRS-3SG	MODP		
5 S4:	Ugu.					
	INJ					
6 S3:	On-u	beye-ŋ	tuskunan	mannïk	kïrakïy-dïk	bihie-xe
	that-ACC	self-POSS.2SG	about	so	little-ADVZ	we-DAT
	keps-ie-ŋ	duo?				
	tell-FUT-2SG	Q				

S3：「どのインタビューでもまず自己紹介から始まりますよね」
S4：「ええ」
S3：「少し自己紹介してもらえますか」

この用例（11）を見ると、話者 3 は聞き手（話者 4）に関係あることではなく、話者 4 がどのインタビューもまず自己紹介から始まるということを一般知識・一般的な常識として知っていることを確認した上で、自己紹介を依頼している。話し手は、どの話（インタビュー）もお互いの自己紹介から始まるという事実に関する聞き手の認識が自身と同じであると想定し、確認している。

2.1【意見確認】

用例（12）

252 S1:	Otton	saamay	üčügey	xaačïstïba-ta	ol	buoluo	***dii***?
	MODW	most	good	personality trait-POSS.3SG	that	MODP	MODP
253 S2:	Xaačïstïba-ta			ahaa	ol	（後略）	
	personality trait-POSS.3SG			yes	that		

S1:「それは（お母さん）の一番良い性質になるのでしょうね」
S2:「そのとおりです。それです。」

用例（12）では、dii は主に推量、可能性を表す小詞 buoluo のあとに現れている。この発話の前では、話者 2 は母親から受けた教えの厳しさについて語っており、252 行目の ol「それ」は、どんなに大変でも諦めずに困難などを克服し物事を最後まで成し遂げるべきだと常に言うという母親の性質を指す。252 行目では話者 1 は先行の発話から、話者 2 が上述の点を母親の良い性質であると判断していると想定しつつ、話者 2（聞き手）が自身と同様の判断（意見）を持っていることを確認している。続く 253 行目では話者 1 の想定の通り、話者 2 が賛同している。

用例（13）

78 S1: D’on-ton bu（0.2）tuox-xa kel-en ih-iex-xe ***dii***? bu biligin
people- ABL this what-DAT come-CVB go- FUT-DAT MODP this now
d’arïgïr-a-r,
be engaged in an activity-PRS-3SG
79 d’arïk-kar.
hobby-POSS.2SG.DAT
80 S2: Ugu.
INJ
81 (.)
82 S1: Aan bastaan （0.5） kim-i kör-bük-kün-üy?（後略）
for the first time who-ACC see-PST-2SG-Q
S1:「家族の話から今の（マジックの）趣味のほうへ移っていきましょうね」
S2:「ええ」
S1:「初めて見たパフォーマンスは誰のパフォーマンスでしたか」

用例（13）の 78-79 行目の発話において、話者 1 は話者 2 がそれまで自身の家族や学校のことについて語った後に話題を変更するという意見（意向）を持ち、話者 2 も手品の趣味に関する話題に移るという意見（意向）をもつことを確認するために dii を付加した文を発話している。dii を付加した文の発話により、話し手（インタビュアー）は自身の意向への聞き手の同意を要求し、聞き手は同意している。

3.1【感情確認】

用例（14）

500 S4: Uonna bili（.） saatar maʁahïïn-ïm arïll-ïï-ta čiexine
and MODW unfortunately shop-POSS.1SG open-NMLZ-POSS.3SG honestly
et-tex-xe bili bu mannïk situatsiya,
tell-PTCP-DAT MODW this so situation
501 kel-en xaal-l-a [***dii*** .] Bili kihi（.） tuox die-x-xe
come-CVB AUX-PST-3SG MODP MODW human what say-FUT-DAT
söb-üy kihi（.） sürge-t-in bili [battï-ï:-r],
right-WHQ human spirit-POSS.3SG-ACC MODW push-PRS-3SG

502 S3: [° ugu.°] [° ugu.°]
INJ INJ
503 S4: xayï-ï:-r kem-ŋe（後略）
do-PRS-3SG time-DAT

S4:「それから正直に言うと、開店は残念ながらこんな時期と重なりましたね。何と言ったらいいでしょう。心が痛む大変な時期（と重なって）」

用例（14）における dii は発話文中に出現し、上述の 4 つの例と異なり上昇調で発されず、聞き手の反応を意識しつつ応答を求めるという意味が希薄化していると考えられる。この発話の前半で話し手は自営業について語った後、途中で開業がこんな時期（大変な時期）と重複したという事実（真である命題）について残念な気持ち（残念であるという評価）を表明している。さらに 500 行目には saatar という悲しみ、悔しさ、絶望の感情を表すモダリティ表現（Petrov 1978 :115）が用いられ、否定的な感情を表す文の意味を全体的に強めている。

この用例（14）では話し手は dii によって同様の状況を経験している聞き手に対して共感（自身と同じ感情を持つこと、自身と同じ評価を事実に対して下すこと）を求めていると解釈できる。次いで 502 行目には聞き手によるあいづちが見られ、その生起位置が 501 行目の dii と重複していることから、聞き手は共感の要求に対して相手の心理状態を理解し、同様の感情をもつという反応を示していると言える。このように上述した 1.1【事実確認】、2.1【意見確認】、3.1【感情確認】という 3 つの用法の場合、話し手は聞き手が話し手と同様の認識、意見、あるいは感情を持つと想定し、そのことを確認するために dii をもつ文を発話している。

続いて相手の発話に対する応答に現れる 1.2【事実肯定】、1.3【事実訂正】、2.3【反論表明】の用法を取り上げる。以下の（15）では 1.2【事実肯定】と 1.3【事実訂正】の dii が連続して現れている。

1.2【事実肯定】と 1.3【事実訂正】

用例（15）

242 S1: Oskuola-ʁa sïld’-an (.) tuox emit tuox oŋor-but tügen-ner-deex-xit duu?
school-DAT go-CVB something what do-PST moment-PL-PROP-2PL Q
243 Če kïra buruy duu? tuox duu?
MODW little mischief Q what Q
244 S2: Mmm (.) buruy oŋor-but baal-lar buo[15] (.) [baal-lar] baal-lar böʁö,
INJ mischief do-PST be-COP.3PL MODP be-COP.3PL a lot
245 S1: [baal-lar].
246 S2: buollaʁa ***dii***. On-u umun-naʁ-ïm ***dii***. （後略）
MODP MODP that-ACC forget-SUP-1SG MODP

S1:「学校時代、何か問題を起こしたりした時はありましたか。ありませんでしたか。

例えば、小さい悪戯とか、何かありましたか」
S2:「ちょっとした問題を起こしたり、悪戯したりしたことはたくさんあるでしょう。それはもう忘れましたよ」

この用例（15）は既述した 5 つの用例とは異なり、同じ発話の中で連続し（246 行目）、また buollaʁa というモダリティの小詞と共起している。さらに「Onu umunnaʁïm dii ／それをもう忘れましたよ」の発話の後半で dii が推測法を表す動詞（忘れる）に加わっているという点は他の用例には見られなかった。用例（15）の具体的な説明の前に、推測法、そして小詞 buollaʁa について述べたい。サハ語における推測法は、自然にまたは予測･予想通りに完了した出来事を表現している。ただし、それ以外に近過去[16]の意味と類似し、時に一致することもある。さらに近過去と異なり、時制を示すのみならず、それと同時にモダリティの意味合い（感動、主張、強調、不満など）を帯びるという点が特徴的であると述べられている（Xaritonov 1947: 213, Xaritonov et al. 1982: 341）。小詞 buollaʁa[17] は本来、推測法[18]の動詞述語あるいはコピュラであるが、動詞述語文に後続する場合はモダリティを表す小詞になる。その主な意味は、「推測」となるが、発話の場における特定の事情や以前の考えに基づいた結論のようなニュアンスも含意される（Petrov 1978: 235）。この意味で用いられる際は、結果を言い表す結果過去 1[19] の動詞に接続することがほとんどであると指摘されている。「推測」の他に dii と同様に「強め」、「主張」、「反論」を持ち（Petrov 1978: 236-237）、さらに事実の強調、行為の完了を表すこともあると述べられている（Xaritonov et al. 1982: 343）。Sleptsov（2005: 526-527）の『サハ語詳解大辞典』では、buollaʁa dii について命題内容の現実性（客観性）を主張する意味が挙げられている。

上記の特徴を踏まえて用例（15）に戻ると、244 行目で話者 2 は、話者 1 の質問を受け、「（一般論として、子供の頃に）ちょっとした問題を起こしたり、悪戯したりしたことはたくさんある」という話者 1 の想定に同意している。この発話は 1.2【事実肯定】に当たると考えられる。さらに buollaʁa dii が付加されることにより、誰にもあること、当たり前のことのような意味合いが強くなる。

発話の続き（246 行目）を見れば「Onu umunnaʁïm dii ／それをもう忘れましたよ」のように推測法を表す動詞に付加され、学校時代は悪戯をすることが多かったが、話者 1 の想定に反しそれを覚えておらず、もうすでに忘れたと言っている。この部分は前半の発話とは異なり、1.3【事実訂正】と見なされる。なぜならば、前半では話者 1 による質問に肯定的に応答しているので、その時点で両者の認識が一致していると言えるためである。しかしながら、後半の発話の場合は、学生時代は悪戯をすることがあり、それを覚えているはずという認識を持つ話者 1（インタビュアー）と、そのような経験はあったという事実を認めるが、それを覚えていない話者 2（インタビュイー）の間に、記憶に関する認識のずれが生じていると解釈できるためである。両者の認識が違っている状況で、話し手は自分の認識を表明していると言える。

1.3【事実訂正】

用例（16）

87 S3: Oʁo sïld’-an mannïk saamay kuttam-mït tügen-neex-xin duo?
child walk-CVB so most fear-PST moment-PROP-COP.2SG Q
oččoʁuna. Onnuk-tar baal-lar
then such-PL be-COP.3PL
88 ebite duu:?
MODP Q
89 S4: Suox bïhïïlaax. Kihi toʁo ere bili üčügey ere tügen-ner-in ere
NEG probably human why only MODW good only moment-PL-ACC only
öydöö-n xaal-a-r ***dii***. （後略）
remember-CVB AUX-PRS-3SG MODP

S3:「それなら子供の頃、何か嫌な怖い体験をしたことがありますか。それともなかったですか」
S4:「多分ありません。人間はなぜか幸せだった頃のみが記憶に残るのではないでしょうか。」

用例（16）は、話者 4 が幸せだった幼年時代について話した発話の後に出現する。87-88 行目で話者 3 が何か嫌な思い出があるかどうかについて尋ねている。それに対して話者 4 はそんな思い出はおそらくないと否定的な答えを出し、次いで「Kihi toʁo ere bili üčügey ere tügennerin ere öydöön xaalar dii ／人間はなぜか幸せだった頃のみが記憶に残るのではないでしょうか。」のように自分の認識を述べている。ここでは、話し手はもうすでに語っていた子供の頃の話に基づいて、おそらく子供時代は良い思い出のみならず、嫌な思い出もあると想定していた相手の違う意見を否定し、上述した用例（15）と同様に、話し手は聞き手の認識が自身のものと異なる状況において自身の認識を表明している。

2.3【反論表明】

用例（17）

303 S4: On-u （kel-en） soroʁor buollaʁïna bili suruy-aččï-lar toʁo
this-ACC come-CVB sometimes TOP MODW write-PTCP-3PL why
nuuččalïï tïl-ï
Russian language-ACC
304 kïbït-a-ʁïn-ïy dien. O↑tton min künneeʁi saŋar-a-r
insert-PRS-2SG-WHQ QUOT however I daily talk-PRS-3SG
tïl-bït ***dii***↓ di-i-bin.（後略）
language-POSS.1PL MODP say-PRS-1SG

S4:「登録者から時になぜロシア語の単語を混ぜながらしゃべっているのというコメン

トがよく寄せられることがあります。それに対して、私たちは普段、このように話しているでしょう、と答えています」

この用例（17）は相手を対象とした直接的な反論ではなく、第三者に対する反論のことを示している。話者 4 が自身のブログや動画によるブログについて話している途中に、登録者たちから受けたコメントについて語り始める。話者 4 は登録者の「（話者 4 が）ロシア語の単語を混ぜながらしゃべっている」という意見を受け（303 行目）、その意見に対し「（話者 4 は）ロシア語の単語を混ぜながらしゃべってはいない」、より正確には、話者 4 が話すサハ語にはロシア語の単語が存在するが、それはサハ語を話す際の一般的なものであり、話者 4 は故意にロシア語の単語を混ぜてしゃべっているわけではない」という判断（意見）を反論として表明している。

以上の考察から、本研究のデータに基づく小詞 dii の用法に関する特徴は以下のようにまとめられる。

・Petrov（1978），Sleptsov（2006）で述べられた用法を参照し、談話上の出現位置により要求型の発話（1.1【事実確認】の用例（10），（11）、2.1【意見確認】の用例（12），（13）、3.1【感情確認】の用例（14））として使用されることもあれば、相手の発言に対する応答（1.2【事実肯定】の用例（15）、1.3【事実訂正】の用例（15），（16）、2.3【反論表明】の用例（17））として用いられることがあることが分かった。また本稿の 2 節で挙げられた dii に関する先行研究とは異なり、現代サハ語の話し言葉の実例を踏まえて記述することができた。

・用例（14）の考察の後にも既述したように 1.1【事実確認】、2.1【意見確認】、3.1【感情確認】という 3 つの用法は、会話の参与者が発話時に認識、意見、また感情を共有していることを前提とし、そうした条件が満たされれば、dii は現れると考えられる。しかしながら 1.3【事実訂正】、2.3【反論表明】の用法も見られたように、認識、意見、また感情が一致しない際にも dii の使用が認められる。この特徴は江畑（2013: 74-75）でも述べられている。ただし、本研究では、知識・認識の共有のみならず、自然会話から抽出した意見と感情の共有についても指摘した。

・今回の研究では dii に関する先行研究において指摘されなかった 1.1【事実確認】、2.1【意見確認】、3.1【感情確認】の韻律的な特徴を具体的な場面を示しつつ、明らかにした。

・最後に本データでは確認できなかった 2.2【同意表明】、3.2【感情表明】、3.3【不満表明】という 3 つの用例について述べたい。まず 3.3【不満表明】に関しては、3 節にも既述したように本研究で用いられたデータは雑談ではなく、インタビューであるので、会話のどちらかの参与者が直接的に非難をするような行動は現れにくかったのではないかと考える。2.2【同意表明】、3.2【感情表明】、の場合は、dii の使用が任意であり、いつも現れるというわけではないと考えられる。さらにこの dii が常に現れる訳ではないという特徴は、ロシア語の影響を大きく受けている現代サハ語の話し言葉においてロシア語彙が借用語としてではなく会話の途中に挿入される現象、すなわちコードスイッチングという言語現象が頻繁に見られるということと関係しているのではないか。つまり、もともと、dii が使われるはずの発話において、ロシア語のモダリティ

の小詞やモダリティの表現が用いられることがあるという点とも関係している可能性がある。

5. まとめと今後の課題

本論文では、先行研究で多様な用法をもつとされているモダリティの小詞 dii が会話において果たす機能を、まず会話における dii の出現パターンを「隣接ペア」という概念に基づいて「要求型発話」と「応答型発話」に分類し、さらに dii を含む発話の内容を「事実」「意見」「感情」の 3 つに分類することにより、体系的に整理した。このことにより、江畑（2013）が提案する認識の一致・不一致という機能と、談話において実際に観察される機能の関係を明示的に示した。

本稿では、談話における dii の用法のみに着目したが、これと意味上類似していると考えられる他のモダリティを表す小詞[20]と、使用制約や待遇性といった側面から比較し、議論を詳述化していくことを今後の課題としたい。またここで提示した分類に当てはまらない説明困難な dii の使用が見られると思われるので、その点についても検討を重ねていきたい。

略号一覧

1: first person, 2: second person, 3: third person, ABL: ablative, ACC: accusative, ADVZ: adverbializer, ALL: allative, AUX: auxiliary, CAUS: causative, COP: copula, CVB: converb, DAT: dative, F: feminine, FUT: future, IMP: imperative, INF: infinitive, INJ: interjection, M: masculine, MODP: modal particle, MODW: modal word, NEG: negative, NMLZ: nominalizer, NOM: nominative, PL: plural, PN: personal name, POSS: possessive, PROP: proprietive, PRS: present, PST: past, PTCL: particle, PTCP: participle, Q: question marker, QUOT: quotative, RECP: reciprocal, REFL: reflexive, SG: singular, SUP: suppositional mood, TN: toponym, TOP: topic, VBLZ: verbalizer, WHQ: wh-question.

文字化の記号

.	語尾の音が下がって区切りがついたことを示す
,	発話末の継続
言葉：	音の引き伸ばし
[ ]	発話の重なりの終了
?	発話末の上昇
↑↓	音調の上がり、下がり
(0.0)	間隔
(.)	0.2 秒以下の短い間合いを示す
° °	小さい音
( )	聞き取りにくい箇所

注

1 品詞の種類として小詞（Xaritonov et al. 1982: 431-449）とモダリティを表す語（Xaritonov et al. 1982: 449-466）を補助語と分類し、それらの形態的及び統語論的な特徴、由来などについて記述している。

2 サハ語における形態的な手法で現れる間接証拠性（ロシア語で kosvennaya evidentsial'nost'）に関する研究である。主に伝聞を表す小詞 ühü（Efremov 2010: 153-154）、完了アスペクト（ロシア語で perfekt）を表す接尾辞 -bït（Efremov 2010: 155）に着目している。

3 文末に現れる 10 の小詞を文末接語として扱い、対事的モダリティ（ühü, ini, ebit（江畑 2013: 71-73））と対人的モダリティ（duo, dii, ee, duu, daa, ebeet, n'ii（江畑 2013: 73-77））の観点から記述している。

4 対話における duu, duo, daa という疑問詞が現れる疑問文の意味的特徴やイントネーションについて論述している。

5 数量（ロシア語で količestvennost'）を表す小詞について述べている。

6 ロシア語で modal'nïe slova.

7 ロシア語で modal'nïe sočetaniya.

8 Petuxova and Sokur（2021a）, Petuxova and Sokur（2021b）は、サハ語とロシア語のコードスイッチング（言語の切り替え）のサハ語母語話者の若者による自然会話（148 分）コーパスを作成し、その作成の手順について述べている。この研究はコードスイッチングのデータを集めるための会話コーパス作成を主な目的としており、現代サハ語の会話の構造やそこで現れる発話の特徴やモダリティを表す小詞などを分析することを目的としていない。

9 命題内容を強める情意性を持つ小詞には dii の他に ebeet, ee, buolbaat, buolbat duo, buollaʁa, doʁor 等の小詞もある（Xaritonov et al. 1982: 444）。

10 例（1）は文学作品から抽出された例で、-larï, -leri という名詞接尾辞の形式は、現代サハ語の日常会話では使用されない（Xaritonov et al.（1982: 138-141）では、この接尾辞は会話でほとんど使われていないと指摘されている）。現代サハ語標準語では、一般的に uol-u（boy-ACC）uonna（and）miigin（1SG.ACC）になると考えられる。またこの文脈では、方言の形式として使われている可能性もあると考えられる。この接尾辞について詳しくは、Xaritonov et al.（1982: 138-141）を参照。

11 括弧は Petrov（1978: 109）による。

12「命題的意味とは、概略、文の「命題内容」（もしくは、事柄）を構成している意味であり、基本的にコンテクストに依存しない類の意味である。」（澤田 2014: iv-v）。

13「モダリティ的意味とは、概略、命題内容のあり方・捉え方や、それに対する心的態度、さらには、話し手と聞き手の人間関係に関わる意味である。」（澤田 2014: v）。

14 会話分析（Conversation Analysis）は、アメリカで 1960 年代に Harvey Sacks を代表とした社会学のエスノメソドロジーの研究者 Emanuel Schegloff, Gail Jefferson によって創始され、発展した研究分野である。「会話分析の関心は，対話そのものの特性を記述するといったことよりもむしろ，会話という日常的な営みの分析を通じて，人々の社会的行為に見られる規則性や構造を発見し，記述することにある．しかし，その研究対象がおもに音声言語による会話であるゆえ，社会心理学・語用論・談話分析・社会言語学・認知科学などにおける談話研究に大きな影響を与えてきた.」（石崎・伝 2001: 140）。

15 buo は buollaʁa の縮約形である。
16 ロシア語で “nedavnoprošedšee vremya”。
17 形態論的な形式は動詞 buol の語幹に形動詞 -tax という接辞が付加し、語末には三人称・単数の所有接辞 -a が付くことによって成立する。
18 ロシア語で “predpoložitel’noe naklonenie”。詳しくは Xaritonov（1947: 213-215），Xaritonov et al.（1982: 341-343），Korkina（1970: 262-285）を参照されたい。
19 ロシア語で “prošedšee rezul’tativnoe vremya pervoe”。
20 本稿の文末脚注 9 を参照。

参考文献

Alekseev, I. E.
1990 *Otvetnïy komponent dialoga v yakutskom yazïke*, Nauka, Novosibirsk,

Alekseev, I. E. and I. N. Sorova.
2017 “Kommunikativno-interrogativnïe častitsï v sostave orfoepičeskix konstruktsiy”, *Mir nauki, kul’turï, obrazovaniya*, 6 (67), Redaktsiya meždunarodnogo naučnogo žurnala Mir nauki, kul’turï, obrazovaniya, Gorno-Altaisk, 449-453.

江畑 冬生
2013 「対事的モダリティ・対人的モダリティを表すサハ語の文末接語」『北方言語研究』3、北海道大学大学院文学研究科、69-83。

江畑 冬生
2020 『サハ語文法：統語的派生と言語類型論的特異性』勉誠出版、東京。

Efremov, N. N.
2010 “Sredstva vïraženiya kosvennoi evidentsial’nosti v yakutskom yazïke”, *Sibirskiy filologičeskiy žurnal*, 1, IFL SO RAN, Novosibirsk, 152-156.

石崎雅人、伝康晴
2001 『談話と対話』東京大学出版会、東京。

Ivanova, I. B.
2017 “Služebnïe časti reči v yakutskom yazïke: častitsï (funktsional’no-semantičeskiy aspekt)”, *Filologičeskie nauki. Voprosï teorii i praktiki*, 5 (71), Ch.1, Gramota, Tambov, 101-110.

Ivanova, I. B.
2018 “Častitsï kak sredstvo vïraženiya kategorii količestvennosti v yakutskom yazïke”, *Evdokiya Innokent’evna Korkina: biografika i interpretatsiya naučnogo i tvorčeskogo naslediya. Sbornik naučnïx statei*. IGIiPMNS SO RAN, Yakutsk, 125-129.

Johanson, Lars.
2021 *Turkic*, Cambridge University Press, Cambridge.

Korkina, E. I.
1970 *Nakloneniya glagola v yakutskom yazïke*, Nauka, Moskva.

Petrov, N. E.
1976 “Modal’naya častitsa ini v yakutskom yazïke (opït opisaniya)”, in Korkina, E. I.,

Petrov, N. E., Sleptsov, P. A. (eds.) *Yakutskiy filologičeskiy sbornik: sbornik naučnïx trudov*, YF SO AN SSSR, Yakutsk, 53-72.

Petrov, N. E.
1978 *Čhastitsï v yakutskom yazïke*, Yakutskoe knižnoe izdatel'stvo, Yakutsk.

Petrov, N. E.
1982 *O soderžanii i ob''eme yazïkovoi modal'nosti*, Nauka, Novosibirsk.

Petrov, N. E.
1984 *Modal'nïe slova v yakutskom yazïke*, Nauka, Novosibirsk.

Petrov, N. E.
1988 *Modal'nïe sočetaniya v yakutskom yazïke*, Nauka, Moskva.

Petuxova, A. A. and E. O. Sokur.
2021a *Yakutsko-russkiy korpus pereklyučeniya koda. Meždunarodnaya laboratoriya yazïkovoi konvergentsii*, NIU VŠE, Moskva. URL : http://lingconlab.ru/cs_yakut.（最終閲覧 2024 年 09 月 1 日）.

Petuxova, A. A. and E. O. Sokur.
2021b "Sozdanie ustnogo yakutsko-russkogo korpusa pereklyučeniya koda", *Komp'yuternaya lingvistika i intellektual'nïe texnologii* (*po materialam ežegodnoi meždunarodnoy konferentsii "Dialog"*), 20, Rossiyskiy gosudarstvennïy gumanitarnïy universitet, Moskva, 1161-1169.

澤田治美
2014 「第 3 巻『モダリティ I：理論と方法』序論」澤田治美（編）『モダリティ I：理論と方法』、ひつじ意味論講座第 3 巻、ひつじ書房、東京、iii-xx。

Schegloff, Emanuel A. and Harvey Sacks.
1973 "Opening up closings", *Semiotica*, 8 (4), De Gruyter Mouton, Berlin and Boston, 289-327.

Schegloff, Emanuel A.
2007 *Sequence Organization in Interaction – A Primer in Conversation Analysis*, Vol.1, Cambridge University Press, Cambridge.

Sleptsov, P. A.
2005 *Saxa tïlïn bïhaarïïlaax tïld'ïta*, 2 tuom, Nauka, Novosibirskay.

Sleptsov, P. A.
2006 *Saxa tïlïn bïhaarïïlaax tïld'ïta*, 3 tuom, Nauka, Novosibirskay.

Sorova, I. N.
2008 "Problema fonostilistiki razgovornoy reči v sovremennom yakutskom yazïke", *Izvestiya Rossiyskogo gosudarstvennogo pedagogičeskogo universiteta im. A. I. Gertsena*, 61, Izdatel'stvo Rossiyskogo gosudarstvennogo pedagogičeskogo universiteta im. A. I. Gertsena, Sankt-Peterburg, 253-258.

Xaritonov, L.N.
1947 *Sovremennïy yakutskiy yazïk. Čast'1*: *Fonetika i morfologiya*, Gosizdat YAASSR, Yakutsk.

Xaritonov, L.N., D'yachkovskiy, N. D., Ivanov, S. A., Korkina, E. I., Petrov, N. E., Sleptsov, P.A.
1982 *Grammatika sovremennogo yakutskogo literaturnogo yazïka. T.1*: *Fonetika i morfologiya*, Nauka, Moskva.

調査資料

Balanov, E.
2021 "Interv'yu s D'ulustanom Pavlovïm – fokusnik, illyuzionist", *Youtube*, URL: https://www.youtube.com/watch?v=eizy-wQmtk0（最終閲覧 2024 年 9 月 14 日）.

Sakhastas.
2022 "Bu kimiy? – Popovtar/ Uyutno Popovtar, Tort, Kiehee tugu siibit?", *Youtube*, URL: https://www.youtube.com/watch?v=L022YkfXx4A（最終閲覧 2024 年 9 月 14 日）.